



# 柴胡桂枝湯の臨床応用

黄 懐龍

当資料の転載、複製、改変等は禁止いたします。

# 一、組成と特徴

## 柴胡桂枝湯 《傷寒論》

柴胡桂枝湯は小柴胡湯と桂枝湯を合方したものである。半表半裏証に表証を伴う者や、肝気鬱結の者に用いる。

組 成	桂枝・黄芩・人参・甘草・半夏・芍薬・大棗・生姜・柴胡
効 能	和解少陽、調和營衛
主 治	外感風寒、発熱自汗、微悪寒、或は寒熱往来、鼻鳴乾嘔、頭痛項強、胸脇痛満、脈弦或は浮大。

## 原 典 《傷寒論》 《金匱要略》

《傷寒論》 「傷寒六七日、発熱し、微こしく悪寒し、支節煩疼し、微しく嘔し、心下支結し、外証いまだ去らざるものは、柴胡桂枝湯これを主る」。

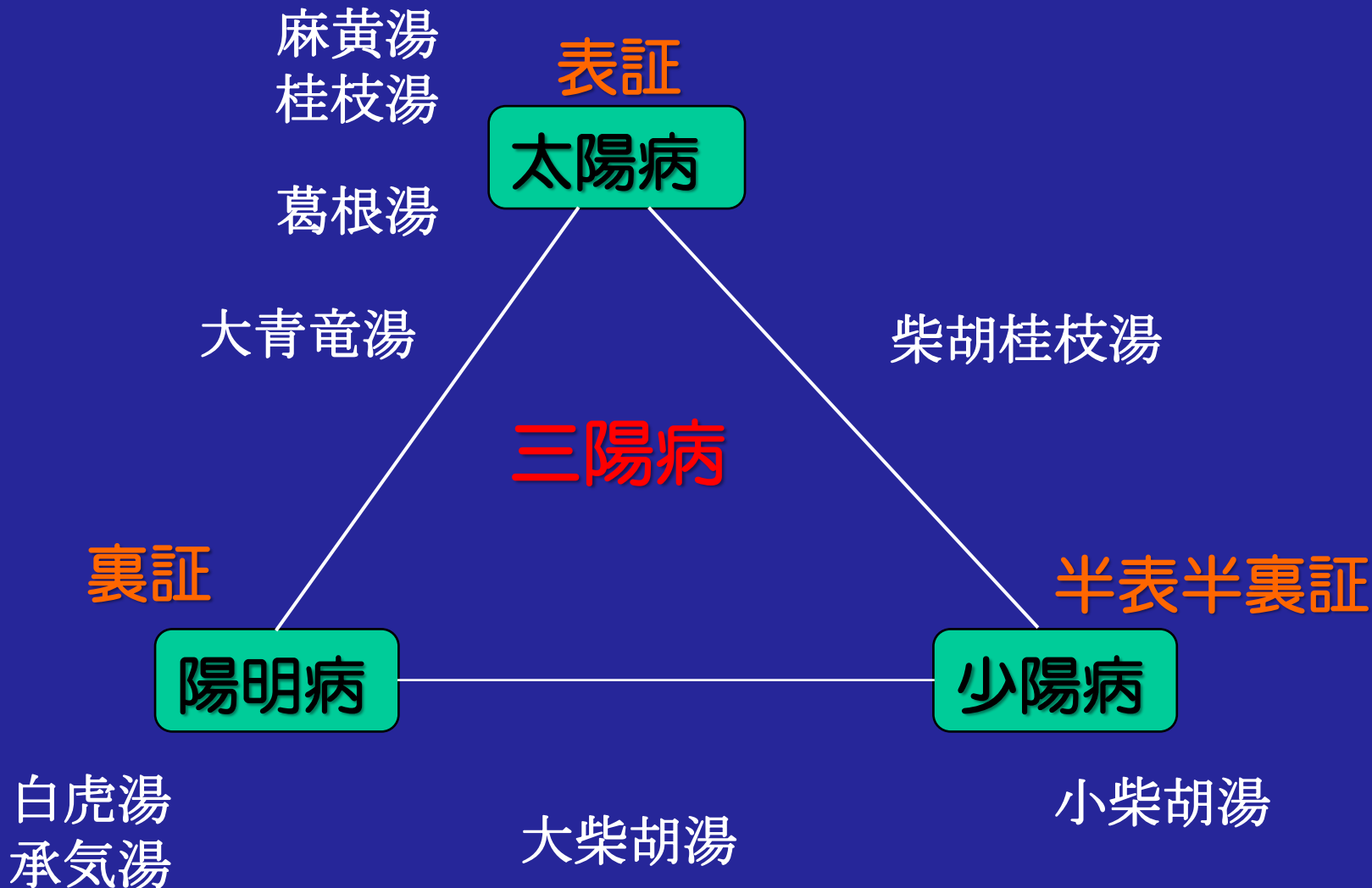
《金匱要略》 （腹満寒疝宿食病脈証治第十）

「外台柴胡桂枝湯は心腹卒中痛する者を治す」

柴胡桂枝湯は《傷寒論》《金匱要略》に記載されている方剤で、発熱性疾患では風邪の後期の症状、風邪のこじれた症状に用いる。すなわち半表半裏証にしてまだ少し表証が残っている者に用いる。

また発熱性疾患以外では、みぞおち周辺部の腹痛に用いるとしている。

# 傷寒六經弁証治療

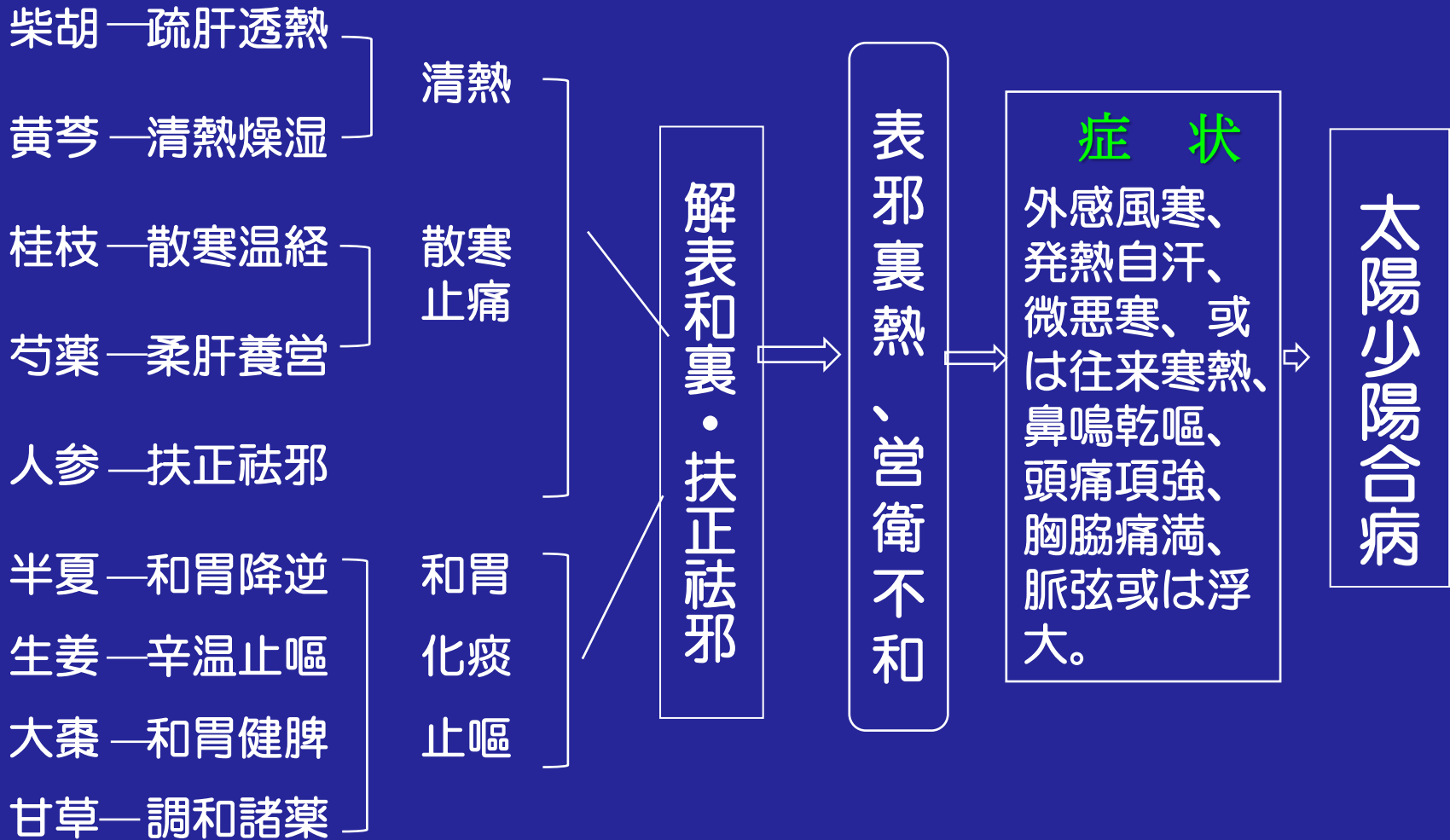


## 柴胡桂枝湯の概説

本方は少陽、太陽表裏両解の軽剤で、小柴胡湯、桂枝湯の各半量を合剤してなる方剤である。桂枝湯は調和營衛、解肌辛散で太陽の表を治療し、小柴胡湯では和解少陽、疎通枢機で半表半里を治療する。

処方では柴胡で少陽の邪を外へ透泄発散して、気機の鬱滞を疏泄する；黄芩は柴胡を助けて少陽邪熱を清泄する；昇散の柴胡は降泄の黄芩を得て、昇陽傷陰の恐れがなく。桂枝、芍薬で調和營衛、解肌辛散し、半夏、生姜は降逆和胃で、人参、大棗は正気を扶助して、より正気旺盛して、邪気に内侵されなく、外へ解することができる。

# 柴胡桂枝湯の組成と応用



## 二、臨床応用

柴胡桂枝湯は小柴胡湯と桂枝湯の合方で、太陽少陽合病に治療する方剤で、解肌発表の効能が有して、外感傷寒太少両陽の病証を治療でき、又外で営衛を調和して、中に気血調整する働きである、内外雑病営衛気血不通の病証をとともに治療することができる。

臨床では太少同感、発熱、咳嗽、喘証、脇痛、胃脘痛、嘔吐、痺証、水腫等病証を治療する。又は癩癧、夜尿症、胆石症、胆嚢炎、肝炎、脾臓炎、眩暈、胸膜炎、肋間神経痛、胃十二指腸潰瘍、急性腎盂腎炎、流行性出血熱軽症、慢性鼻腔炎、蕁麻疹、産後発熱、原因不明の発熱、児童神経性起立性調節障害、小児厭食症等に、少陽兼ねる太陽病機者に。

## 【使用目標】

\*風邪遷延、発熱発汗、微悪寒、身体痛と胸脇・心下微満、腹痛、食欲不振が見られる場合に用いる\*

### ■太陽少陽合病（風邪）

（特に胃腸症状を伴い、長引いて治りにくいカゼに用いる）

- カゼがやや長引き、発熱・微悪寒、自汗、頭痛、筋肉痛。心下支結吐き気、腹痛・胸脇痛、食欲不振、口苦など胃腸型感冒、慢性上気道炎、インフルエンザーなど。

### ■脾虚気滞（消化器疾患）

（腹痛が主症状で、緊張によって増悪するものに用いる）

- 慢性胃炎、神経性胃炎、食欲不振や疲労倦怠などが現れる。
- 胃・十二指腸潰瘍で、ストレス性潰瘍を再発する人
- 過敏性腸症候群で、腹痛を伴う下痢
- 慢性肝炎、慢性脾炎、慢性胆嚢炎、胆嚢結石。
- 潰瘍性大腸炎、クローン病。



## ■肝鬱絡阻（神経内科疾患）

- 精神的ストレスによる自律神経系の緊張状態によって、自律神経系の異常をきたし、憂うつ、イライラ、緊張感、不眠などの症状が現れる。
- 神経症、不眠症、てんかん、小児の神経症、自律神経失調症、起立性調節障害、更年期障害など。
- 神経質で、カゼを引くと痙攣を起しやすい者。
- 神経質で、胃腸が弱く緊張するとすぐに食欲が低下、腹痛、下痢などを起す者。
  - ・腹痛が強い場合：柴胡桂枝湯十芍薬甘草湯
  - ・食欲不振が強い場合：柴胡桂枝湯十六君子湯
  - ・腹部膨満感が強い場合：柴胡桂枝湯十半夏厚朴湯
  - ・下痢・膨満が強い場合：柴胡桂枝湯十胃苓湯
- 神経質で、胃腸が弱く、よくお腹が痛くなる者。

## 【臨床加減】

もし胸中煩躁で嘔吐なし、半夏、人参を栝楼根に換えて、腹痛なら、黄芩を芍薬増量に、脇下痞硬なら、大棗を牡蛎に、心下悸、小便不利ものに黄芩を茯苓に、口渇くない外微熱がある時、人参を防風に、咳は人参、大棗、生姜を五味子、陳皮に換えて、婦人熱入血室、熱傷陰血なら、地黄、丹皮を加え、瘀血内結、少腹満痛では、人参、甘草、大棗を延胡索、当帰尾、桃仁に、寒を兼ねる者に肉桂を加え、気滞では、香附子、鬱金を加える。

## 【使用注意こと】

外感病邪表に或は里に入った時に、一般に使いません。もし使う時に病状によって処方を加減する必要があります。マラリアで本方に抗マラリア薬を配合する。

## 三、臨床応用経験

### (一) 体虚風邪の治療

体虚風邪には、気、血、陰、陽虚の見分けがある。臨床では、体虚風邪の多くは、臨床症状はあまり明らかではなく、自覚的に眠気怠いだけで、少し風寒にあっただけで、風邪の症状が現れます。多く患者がくしゃみ、鼻水、少し悪寒があって、あまり発熱しない、よく風邪が長引き、繰り返す風邪が引く。この風邪に対しては、単純に発汗すれば、正気が更に損傷され、病気が治らなくなります。劉先生は傷寒六経弁証理論によって、体虚風邪は営衛不和、衛外機能失健のためであり、その病邪は少陽半表半里に及んでいます、正気はすでに不足しています、太陽と少陽の両経の病気のために、治療は両経の配慮が必要で、故に柴胡桂枝湯は正治の方剤である。

体虚風邪は人の免疫機能低下と関係し、柴胡桂枝湯は体の免疫機能を増強し、造血幹細胞がリンバー細胞に分化して、正常のマオスの免疫機能活性化する。臨床試験より柴胡桂枝湯で児童急性上気道患者を治療18例で、著効12例、有効4例、無効2例でした、中に最も改善した症状は発熱、次は食欲、咳、くしゃみ、鼻水症状を改善した。

## (二) 肝氣竅証

患者が自覚的に脇腕胸背部に一つ動いている気流がある、四肢或は上下、左右、前後に行ったりします。気が動いた所に痛みや膨張感があります。息が逃げ込むところに痛みや膨れがあります。この時、患者は手で痛いところをたたくと、げっぷをしたりして、症状が緩和されます。この病気の多くは西洋医のいわゆる神経症の類で、更年期後女性によく見る、中年の女性と男性は偶に見えます。この病気は単純に疏肝理気の治療方法では、効果がよくなく、臨床経験によって、柴胡桂枝湯で調気活血より、効果がよくあります。本方は小柴胡湯で少陽を和解して疏肝理気し、桂枝湯で営衛を調合して通陽活血を通すことができ、血気が調和して、諸症状がよくなります。臨床の中で常に仏手、香櫞を加えて、治療効果は特によくなる。肋間神経痛、神経症などに、肋骨を抑えるとゲップ、吐き気などで症状が緩和される。

### (三) 肩の背中疼痛

肩の背中での痛みは臨床でよく見られる症状で、寝違いや長時間のデスクワーク、タイピング、労作などが原因です。また、頸髄症や肩こりなどの病気はこのような症状を引き起こす。

太陽の経脈は人体の首背中の部分に沿って巡行するので、太陽経気が阻滞されると、首と背中での不快感が多く出て、痛みさえ出ます。張仲景は『傷寒論』の中に、主に解筋祛風、生津疎絡の治療方法で、汗があるかないかによって、汗がある人は桂枝加葛根湯で、汗がない人は葛根湯を区別選択する。

もし首の背中と肩が同時に痛みますと、上記の両方の治療効果はあまりよくないです。両側は太陽経脈ではなく、少陽経脈が通っているので、この時は小柴胡湯で少陽経脈を疎利して、桂枝湯で太陽経脈を疎通する、太少両経脈の気は正常に運行することによって肩背中での痛みが治ります。臨床の応用の時、よく葛根、姜黄、紅花、羌活、独活、川芎を加えて活血止痛効果を増強する、新久の痛みに関わらず、多く手に応えてもっと良くなることことができる。耳後ろの神経痛と、五十肩、肩周炎も治療する。

## （四）四肢疾病の治療

四肢の病気とは、四肢がしびれ、痛みの症状をいう。臨床では、西洋医学のリウマチ、リウマチによる体の関節痛や末梢神経炎、脳卒中の後遺症などによる手足のしびれが見られます。これらの症状の臨床治療は非常に難しい。特にリウマチによる小関節の痛みは、なかなか難治します。劉先生は《傷寒論》の原文から柴胡桂枝湯の主治症状に「支節の煩痛」があるという論述に基づいて、この方剤を運用して一定の治療効果を得ました。

臨床の運用はよく藤類の活血通絡の薬、例えば、鶏血藤、絡石藤良いものに参加します効果はもっと良いです。



## (五) 脾胃疾病の治療

現在、柴胡桂枝湯で胃、十二指腸潰瘍の痛み治療に臨床報道が多いが、そのメカニズムについては少ない。劉先生は、柴胡桂枝湯は小柴胡湯と桂枝湯を合方で、小柴胡湯は少陽病を治療する主方で、少陽多鬱、鬱では気機の昇降出入が鈍くなって、脾臓の昇降機能に影響して、消化不良の症状を引き起こします。例えば「心煩喜嘔、黙々不欲飲食」、その中でも「或は腹中痛」という論述でした。小柴胡湯が胃腸病を治療するメカニズムでは、《傷寒論》に「上焦得通、津液得下、胃気因和」という論述がある。桂枝湯は《傷寒論》に太陽中風証を治療する方剤ですが、営衛を調和させ、陰陽を調和させ、脾胃を調和させる作用があるので、太陰病の治療も適しています。太陰腹満時に痛みを治療する桂枝加芍薬湯は本方で倍量芍薬からできています。柴胡桂枝湯の主証にも「微嘔、心下支結」という記述があります。だから、本方剤も脾胃病を治療する良い処方である。臨床胃、十二指腸潰瘍を治療する時によく白芨、三七等の活血鎮痛薬を加えて、更にいい効果が得られます。慢性胃炎、腸易刺激症候群などにも。

## (六) 肝硬変の治療

肝臓病気を治療する時に、気機の昇降出入を調整することを強調して、臨床では柴胡類の方剤をよく使い、さらに加減して一連の有効方剤が産生して、例えば肝臓の気分病を治療する柴胡解毒湯、肝臓の血分を治療する柴胡活絡湯など、臨床は全部不思議な効果があります。肝臓病の患者が病気が長引いて治らなく、気から血に及び、経から絡に及び、腹が膨れて、脇部は刺痛、顔色黧黒い、脈沈弦、舌紫暗瘀斑などが現れます。西洋医学検査ではアルブミンとグロブリンが逆に、TTTは高くなって、早期の肝硬変者と診断して、いつも柴胡桂枝湯に人参、大棗の補品を除き、その他に鼈甲、牡蛎、紅花、茜草、土鳖虫等肝脾の血脈瘀滞、軟堅消痞を治療する漢方薬、肝臓病の進行をを阻止することができる。慢性肝炎、肝硬変、SLEも治療できる。



## (七) 神経衰弱症治療

研究により、柴胡桂枝湯は人体内分泌機能に対して一定の調整作用があり、特に脳皮質の興奮と抑制に対して双方向の調節作用があり、神経衰弱による一連の症状を調節して除去することができる。ある臨床症例集計より、柴胡桂枝湯を加味して神経衰弱の60例を治療して、毎日1剤、14日間1クールで、一般に1~2クールでよくなりました。

## (八) 脳虚血の治療

実験よりは柴胡桂枝湯は脳神経元の虚血性損傷に対して保護作用があることを示した。同時に血液循環を促進し、脳循環の血流量を増加させ、脳虚血を改善する効果がある。

## (九) その他

柴胡桂枝湯は狭心症、不整脈、更年期障害、アレルギー性鼻炎の治療にも効果がある。



ご清聴ありがとうございました。